



林 妙
 語 竹
 七
 偏
 人
 幸
 中
 下

13
 3121
 1



~13
3121
特 1-5
45

へ13
3121
1

妙作七偏人初編

唐山吾北七賢人
物御の多き所なる

知るは
藤竹の林は酒落瑠璃

未だ
縁の元祖と呼ぶ
春の亀

今に
名と安
深

門
七福や春の始
舟七粒

彌
命と延
天神七代
北斗七

印
昭
和
九

名もさし砂は松が枝に葉の秋も
 久この雲井を流る羽を神と
 千代の寿もあそびをぬまの初も
 奉て雲井を流る羽を神と

とるうり

丁巳青陽

松真下道又類

Handwritten note or signature at the bottom left of the page.

東都

梅亭金鷲編次

○

異竹の代の人並に松を植は隙子を春の葉に
 千秋万と葉もつちやらの名のとつと春を
 形瑞源もふ七人の勝多の鬼の提灯を
 松が親の名で来る春の礼を神樂後ま
 志々る遊がもうある恵方の蘭玉や一
 ぶふ二々こころの四ッ人

きりまきたるやうに鞠唄紙書あつらひのうらりゆ自然長閑と
さそふ性来の春通あつらひのふ月あつらひ懐とまき一避あつらひるらん職中
の湖上の風の柳橋あつらひ阪人の子の伴あつらひ義あつらひより老子あつらひ莊子の財あつらひ居
まそ怪あつらひ居あつらひよりまことのみ氣あつらひあてあする茶あつらひふしと家あつらひ造り
も有あつらひ徳あつらひの人の若あつらひ臨あつらひ居あつらひ何あつらひそよを日あつらひとの事あつらひ賣あつらひにん化あつらひふ
るるさあつらひ能あつらひ樂あつらひ人あつらひ女あつらひ房あつらひかあつらひの悟あつらひをるとあつらひるるとさ
風流あつらひかりあつらひ寡あつらひぐしあつらひの春あつらひ流あつらひ舞あつらひがあつらひ大あつらひ神あつらひのふとさよりあつらひる
今年あつらひの女あつらひ本あつらひ番あつらひの初あつらひ狂あつらひ云あつらひ不あつらひ知あつらひ明あつらひ主あつらひと工あつらひ藤あつらひ九あつらひ悲あつらひあつらひるる

制多あつらひ迦あつらひ童子あつらひと八あつらひ幡あつらひの三あつらひ角あつらひ珍あつらひ迦あつらひ羅あつらひ童子あつらひと迦あつらひ伽あつらひの小あつらひ藤あつらひをあ
まのせりふを世あつらひ花あつらひつけく世あつらひ処あつらひの身あつらひ振あつらひをあつらひるる一人あつらひ監
えあつらひ長あつらひさあつらひとらあつらひ人あつらひ同あつらひ氣あつらひ求あつらひむ茶あつらひ芽あつらひ若あつらひ虚あつらひ居あつらひ松あつらひうららあつらひはより
まてのつそりト案あつらひ内あつらひもるあつらひ入あつらひ来あつらひりイヤお目あつらひ出あつらひとらあつらひのあつらひ度あつらひ
イヤお目あつらひ出あつらひ十一あつらひ四あつらひ度あつらひのあつらひッあつらひヲあつらひ何あつらひ花あつらひとらあつらひをあつらひせんあつらひねあつらひおあつらひ寒あつらひ
のそあつらひのあつらひ題あつらひとらあつらひとらあつらひ人あつらひはあつらひ舞あつらひせんあつらひ七あつらひ類あつらひのあつらひ橋あつらひへあつらひおあつらひきあつらひイあつらひれ
突あつらひへあつらひ梅あつらひのあつらひ老あつらひ木あつらひのあつらひねあつらひとらあつらひのあつらひ身あつらひのあつらひ宜あつらひがあつらひそのあつらひ財あつらひがあつらひ大あつらひ神あつらひのあつらひ梅
とらあつらひよあつらひのあつらひと外あつらひまると毛あつらひのあつらひはあつらひてあつらひるあつらひ茶あつらひ満あつらひと茶あつらひのあつらひ満あつらひてあつらひる

と瓶と辨あひせをまるぜ茶ある二人が来るさうく茶灌茶
まのゆきの箱づけきとその肘かさうまて土瓶とそつち
例もるひあやアまて大辨のね長眠るる晩お寐てうの
はろとく春の春りく些陽気おんね今茶先日や
晴くまのりのがさりサ茶智經才のやうい一夜ぬる
あけの太陽もがらて居申うけ息どまど初春の内の上
へと陰みへ版へ陽と蓄へてむ防弁ご自己るんどのなる
ての天地の氣候と同体く性ところが妙との人のご上茶

陰中が陽あうさうと陰症の傷寒陰熱がうきそび
まると気がうらむるぜ陰り防まも入来るるまけ仲る
の下太帝が所一障子のるう首をうりつぎ出陰「孫淳
ねけの茶ア家鶴と戸板へ茶せてるまが宜うら陰「何ぞ
う釈もあうねて来ると垂おさうでほア「五イ氣の利
ねえ早く遠入てあともてねと風が来てりるのそん
その面い何指をんご烟にむせと絡の糸お同をうりある不
まよふやうて美お重忠さあの内をりあて来ておむ那を

一多ん小順おんくお馬まののてて毎い一い十じころろままやや面めんのの意いのの人ひとのの言ことささう
 とと若わかくくささららううのの自う分ねがが出こ面めんがが悪あ七しちまま清せいををああままけけおおせせう
 せせううととままよよととままてておおららせせおお一いややモモシシ世よおお一いのの棒ぼうはは六ろく
 毎まいととけけききどどたた報ほう五ご方ほうがが根ねととりり底ぞことと渡わた川がわ四し本ほんをを悪あく
 口くち雜ざいととのの人ひと若わか阿あ古こををああららうう琴こと奏そうととささららううおお持もちたたままええ
 中ちゆう梵ぼん福ふくがが出いてて今いまままををせせつつうう宜いみみをを志しこのの中ちゆうととささららうう此こ方ほう
 ととううのの威いととかりかりててままるる瓶びんとと志しおおままててううはは中ちゆうるるめめががナなシし
 亦また茶ちやめめここののままぞぞがが横よこ合あうううう口くちとと出いてて水みづ煮に大だい煮に煮にののるる一い

とととと信しんずずううととああののててココレレササ おおめめ入いととままのの唾つばがが露るのの中ちゆうおおおおががららうう
 ととままららててああららううのの世よををづづううおお志しささららうう一い十じ今いま虚きよ居い松しょうがが自じ己ぎ
 のの月つきとと志しよよ初しよハハととああららううののううままななげげととのの小こ報ほうののタタのの
 寶ほう船せんのの一いらんらんどど今いま年ねんととをを宜い初しよ後ごととんんずずううととあありりののてて上じやう
 小こ早はや森もりをを志しととささららううががササアアそのの宜い後ごととんんみみ天てん定じやうととここ
 上じやうととここととままててみみッッのの後ごががあありり四しツツががあありり一い九くツツががあありりハハツツがが
 ろろりり一い七しちツツががあありり六ろくツツがが一いととささららうう天てん下げととぬぬのの昇しょうるるももああららうう
 森もりををびびままててままんんぢぢりりととももああららううととああららううととああららうう一いツツとと後ごをを

先くはつていざうく子めのことろからせういりの
早きと虎をひるぬの如くはゆもくさうはらうと
のこころがやまひの己まへのもののおまりの年を
くまへ紙をついやす未志よさどまへん申すはら
て物を申すうちあいかさくは成るやせんて首が
まらうままらへへのぶちやけぬ等ア物をくら人の
物のするあか相を付とナす如くお青のまはらふ
せらの者類ののと帆立貝であつてあつてやういやまの
の

茅で寶珠の玉の性一とまひごと一茅とんぐひ出すの
るる寶珠の玉でまらつて放座の玉でらう一徳今の
初夏の性一の後ぶがサアその放座の玉イサ放座が
秘く寶珠の玉とまらつてこの年月をぬくると性良
とめが仕業で自己の天窓へのりから岩のまらるる拳固を
ニつてつて西の小窓とまらつてやうまらつてサア起る今朝
麻とまらる由方家がある是れほど強くやうう格も根つ
うまらつての痛うう秘への狭楹あつてまらる石天窓う

ソラ亦お酌ご奇妙と世度いもあやうややうアちり
まきくコサ一人でせんわふら務するつりりのご
七献ちやうごのし一盃でふる美味の産の
まさう先七ッうあうとぞんたまがごみまの私
を糧のやうごとし存後まやうイヤまう條おお割合の
よの山監定で残ふ小徳まご一合さるの山監定は小
てとつくりき酒はりまの山産のま子後今日彼
招ふ山集會ともちう梅で一人つ九条酒とつて居

まご友條お泡盛とひまきへ何招味蘇酒小焼酎
おの寡さじい手ゆまのび登りあう玉緑の山らの鱒
あるがみぞんト戸柄をぬぐニッ鱒のころ幸いと彼方の
まご回川お到來の一瓶お青いあくとゆえよりまうち
ご同あの中波と濁りのあのころと酒純まとおがし
り足元由昔老酒とあるまやめあがり是は酒
と西保命酒おあつうぐねのころ孫右味淋の酔へ
まご由蘇る陸羽油おぞんトなおります茶の白ごけ

九指の出来後人かああまやア世四ッ小辨を替へ二階上あの
人仕舞ね人あト承名あ「まどい」の西で下鼻をるみ「茶を
一ッひようつとつと熱うつはかひうまね人あ「五五さゆ」の
るあとまる奴どト人あふそ処をたうさづけ二階へ上まら茶
次弟のまのそ「司ハ大君大人サア」此方らん「然らハハ
免とまらつとまら「今日ハ四年賀ふ出さのぞいハ
やせん昨日書函の出初と煮て煮柳菴と源氏唐紙
禱の二年終つと周巻まらうう大人の風習がさうらう

つとれはたがまらつて来後人あ波曉子のむえおそるまら
我ふゆちをうらうと若光が猿江の別宅へ性や「まら」と彼人
か相愛らば老子ぶつて住付の菓子う酒の青都て穴が
穿つて奇級抄とあづじうを種りて出さぬを是ハ何
屋波の何処と一と星とさ「あの流石の赤慢も鼻を折
美小夫人の食おお草とた刀おの出来後人とのつて替さ
「か子まらまの何おお腹が食ね人」とんまらつとの間に
寮明開ううお竹にお森お松をさうへ今先九尾の百面を

かぐおる厚さふすりくと切るは菓子餅へのせりて死へ
て鉄瓶の湯と茶碗つぎ彼香茶とて為て用い是の世
多きを死にぬを引いて指く自ひもぬおもつらう手せん
う熱のう一つ上つてゆらんるるの茶煮へ糸へ美のせり
イ十玉をたがへおそ目つてこれわく十玉をたがへる茶
よりいふの香茶のとうが定げんストひるる彼湯と下
はちよいと飲ゆぞ可笑る顔とておとす一茶ぐらせ
スウ、ホウ、と息をととえ吹く指香茶の氣が付ねど二

階小まを指ると人のふれ出はむらりの可笑さをあつとてえ
く竊く夢の香茶より七及香茶のとうが利をうきうき
いませう「ロイツ」香茶へはて銅壺のふとをたぬるすう
事とてせませう「それ」山椒でゆはります「山椒」
お遠入ておひます「ま」くゆるるて山椒とらて指さ
スウのホウ、と息をととえ吹く指香茶の氣が付ねど二
指と突かざつて飲てくは指と香茶のたるる菓子餅
押やり「その羊羹」新製とてのうらうらうらとららんる

蕃椒の種こぼしどよほこぼしそのまじりまじりアツトアツト云て返り返りのまじりまじりの
唇をひらひらくりくり入入一尖らせ尖らせホウホウスウスウククアアククアアククと息を外へ
吹吹てて唇唇内内涎涎ののままじじりり顔顔へへつつららうう鼻鼻の上上のの汗汗ををらら顔顔は
うう湯湯乳乳ををまま赤赤ふるふるてて唇唇ととまま野野良良七七とのの能
樂樂連連中中ハハイイ及及所所のの同同座座ででのの唇唇ののままじじりりまますすハハ云云るるままじじりり
妻妻細細るるままじじりり上上りり鼻鼻りりホホイイ見見のの大大君君をを生生たたぶぶららいいおおみみぞ
のの唇唇ののままじじりり連連中中ののままじじりり末末後後今今ハハ右右唇唇スス末末今今ハハ由
末末後後今今ハハ右右唇唇スス末末今今ハハ由
末末後後今今ハハ右右唇唇スス末末今今ハハ由

たずぶたずぶトト首首ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より
のの可可笑笑ささをを懐懐ええううひひててののフフ・・フフとと吹吹出出ままててははをを押押へへりりおおささ入
ららままじじりり唇唇ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より
一一度度ハハ太太痴痴ハハ天天堂堂ををままじじりりココウウクク妙妙づづククタタのの宝宝珠珠のの玉玉の
ままじじりり唇唇ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より
ぐぐとと唇唇のの筋筋ををままじじりり煉煉羊羊ををままじじりりとと喰喰つつててゲゲエエツツククとと筋筋
ををままじじりり唇唇ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より
ままじじりり唇唇ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より
ままじじりり唇唇ををままげげてて監監ええ唇唇をを世世防防二二階階ののここ人人のの先先刻刻より

流らまよんところあく事の本へ後五王サ彼板の流る
とあるむもあやしくと下月をやうもあやすが海子た
板の白麻小かざらて二二交する初茄子より一山二交の
茄子のまううう味もどさんどことせよまま実には中
瓦もあへあくをらまよ二日月やア特製どの初りのま
骨とあやりののは産やせんサア特製公是の初製の香
お灸ごこのうう大君先生小由あげこのうお灸由一焼
お灸ごこのうう茶碗たぐ湯と次で彼香灸と推まうう

サアと五廿六粒七がツアお茶養度でも中うのイエとわのく
左粒あつるういお灸ごの君はりのまうサお羊羹の月
由に大さ左粒の本と推ていさ灸まう必まうは心あま
ひは灸て十の世イヤとまの熱いお湯ご一彼湯の茶をんを
トへ灸大君の扱んで灸ひう羊羹をりてお世扱の生に
て推はしう丸あううて扱はしう鬼角小生具を白ひ
がまま何なるあううと灸灸とあまて日れと向ウツアテ
ぞまう身扱まよと世七の石が付は下くまう所らうに

「五正いれく」の志地まうり時良んか以小便をこぼさずやぶら
たはたも時ふする物根をこぼすやうに困りさうする類を志ん
監え番をこぼす茶め番がナダ小様ねん教とて実正以小便成
やぶらさうと出さうとまアやぶらと根をのサアやぶらと根を
のあう衣教のつま湯で番をけつやアあうねんをぶら何
とも世老やアねん「ま」地のは法あるものやあ教いまうまを
さう湯あやア志のが積象祥のラットとらつ由根根のらト出
が知らさう今日のをあての番をんごらけ「ん」を根をつを律の

合ねん中にはこのまあまのうこ世祭あま律利の酒をらつもの
うけ根あまをこぼし人なま小便さうと係らつて世下を弟さま
欺らさる根を甘はさるものとさう之井四百の小便あう彼根
まを掃除をまやの勿体さトまあう虚長根のま小便
かあまにまに満つて番を酒とまの平氣あてはと困りま
吸ひアツマツペツクピョクくさうやま志の小便とて鼻へケアガガ
ケアまらあてケアツケ。マ雅う早く漱の水をたて来てさア
ケアケツクピョクく「マ」イ様ねん友人の教へ咄をするさう「類」へ

虚ろゆす 揺ぶらちやアのりやアサ物うり止るものごとく
色どあつことちやアぬる毒はせん「美正に宜敷ね又晒露を
あぶらぐる大らぶらう運けほどあは外のおでそね何れ
お節の毒どあはとアあひ又りや遠へねるんおれも以某
のんせしゆ世はぢやア腹が愈ねアア何れがあやまらう
アイタラエ どの好良ふぎけるナ。アアカカるとねまう
まらう 才振ひあるがうまう成度「アア」は方うねる者
きう 突飛えん虚呂ねの周奉て厨へひまらうとの見えや

くどお所そと二階のほうろく老番三人お飲ん下りありへ何れ
のらこちえん 羊羹の美味うらうらうて天井が騒
とあつて一匹の虎のこた「アア」やア宜が毒はせん大愛がある
せナ 大愛ど「アア」何れが処「アア」せんツイの二件「アア」何れを
「アア」下たがとせんと尻跡と橋と虚呂ねがツイと小便を
あつことの人「アア」その小伎の大懸膏ては舞うらう宜れを
まう一皮あまの漬ははひとせさアあるか「アア」正しく福より心抱
と二階へ上つてあまの漬で橋を西を噴くを聞らせるやう

みアドク 二階 上より下へ 虚長 松の 所より 出た 流石 松
の 色も ぬる 水も ほど 汲て 持ち 上り 来た ところ へ 湯を 掃除と
まて 仕舞 と 自己 ア 湯も 使え 来た せ 小使 と 膏の 煙を 吐
けられ 二階 の 皮の 洗濯 と 来た 来た へ ちや 何分 にも 何
いぬ へ 自己 湯も 使え 来た へ 上 へ 自己 湯も 使え 来た へ 湯に
可憐 と も 裁下 げて 三人 へ 存心 せん 一寸 洗濯 へ 使え 来た へ
る せ 二階 の 湯も 連て 使え 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
や ア 矢張 赤い 人の こと へ 夢 二 片 小 する かの 一 片 松 する と 二 夢 二

今 へ 悦 ぶ こと へ 涙 ぐ こと へ 逢 ぶ こと へ 泣 び 床 の 二 三 寸 部
際 へ 牙 擦 と 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
衣 履 と 脱 捨 する 候 へ 松 桶 口 へ 粒 と む と 風呂 の 中 へ 張 へ 粒
み どの 噴 つ へ 飛 ぶ こと へ 人 へ 焼 け へ 六 人 へ 火 の 射 へ する へ 飛 散 へ 人
い ち ち ち 飛 ぶ こと へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
下 へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
二 三 尺 虚 長 平 へ 何 処 へ 彼 処 へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
お 公 家 へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ 来た へ
小 佛 の 奉 加 帳 と 出 置 雲 と 三 升 湯 へ 出 来 由 仕 ね 帳 冊 と 出 へ

報ふよて今生入善なるに生れん事と出て死に遠へねまふ
かおのの体とのみのおちねアねん悪ぶとのみのお湯へ送入よりや
海の中へ送入て珊瑚樹とん付さる宜らうと是る不吉味のね
十寸男及とかしよのどの物でもおのりあくるのいける月の
先神お大急天佛小黒本等歌人お大伴の事を知者おの
湯の源の首経の悪九の腹の痛を治し湯の塩味の
とるせむおの上をさる人とはなる老をさる人とは称する
お羽織小黒華おじし改申もがに方とがめをひるれる

朱岩の湯の事とあるお湯んそのひん大急捕あやちう
アツらつたさるお湯ん居て所はるく入らとねせ「体
冷く居るく湯んえ物の根にやよのどしきこをりおやえ
育ちやうおの沃るめが湯さるとりの湯が体念ると
ゆゑを編と云葉で酒がをさる酒さる茶のさる茶を
おん股靴の知が洞のさるさるとりの入りのどしきサ又おやを
練るを送入とはアイヨ其の凡長は湯う免て多く三の
湯さるく「おんお湯さるはまんの湯と云さるお

ヨリ引くキヤリクひやうをん考やくト下志知虚呂松が雜ッ
久まを身おも製志を茶め右の一人美小成入腕紐道中後
まをよりのまをどをより深き周呂袋を多く運入煮るるを
赤種に渾身をまて御ふ上の板を跨ぎ中の足は踏
ふけ考あつくと云るが外の足の足を上げて運入とするその
拍子に中の足の足を上げて運入とする様さまに周呂の
へ情りまをどでツフ多くやアアガク。ツアツとひがたまるその
手先が情お運入へ居る人の畢丸へさつとを候繁ありと

捕まふ人の男の顔と敏めアア痛と世も鈍め何とする
潮と湯う音と中一まあがらんとする様ツ小松を力まを
突飛をまも亦余りと向へ倒し隅の方に都とを唄つて居
ま人の天窓へ香との入秘湯とあびせまをどが物ともを彼
男がまをど中一突度す小團六の方の板羽目へグンとこまど
天窓をま付アア~~~~世奴等ア何とひとのこを仕やアアト
眼をむれ出せば都とを唄つて居る彼男 天窓でも食
へ書きたり上げて人の天窓う湯とあびせやぶつてぐん云

あやがると獅子の鼻を捻り切て腰後座の肴板よすぞ
いふまじつとよ上茶め茶も勃然とあり王自己が鼻が
解き鼻ごとくさるるさるるの男が一寸つらと清勝けりまが
鯨の煮きると統う物へまの思にんあらん惟ふ形おに
て角丸もよもいさ征み大男友さるるは後の高尻
色あまがうコシノ袖も鼻ごとく鼻の鼻もあつ鼻が
さつとさつと袖もさつとさつとさつとさつとさつとさつと
何うさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと

流の隅にけりぬ顔は洗つて帯下太帯と虚尻松の
頻るに多く笑ひるる續て後より上りて来茶める感心と
美おおけ未味の残残さへんさるははさる余り中流に
そり方へ突飛さると世方へ突飛さると一番のおもお羽目コッ
キリ天窓とさ付てあるさア物さるんごさ居てすすト彼コッ
そりか幕切の拍子木さるる「後生おる人かつん扱おまお
めさ益るとさこのおをさ自己ア彼佐の離は術ちやあ
あトさつと「マイダラー人の越てさる西ささるお自己が樂はは

お指やアがるおあこもやア不疾の上はど加勢とくは長根とる意
て同じ根おをくうう手と伸て毛と引張る尾と突刺さ
あやアがるのでめ一丈とく桶でも孔のでも乳の付ね根を
とと既思るるおあこもやア不疾の上はど加勢とくは長根とる意
謀果かたる心底が知らねる空懸にの世せぬややねる
茶の七 丈りやや自己とめら膚するのそら根するめは根を
お池で候せる根おは返しするのい方寸の内ふまのど一丈とくね
亦お代末岐の子丈とまど一うう智者の智考とていられと素案

お指やアがるおあこもやア不疾の上はど加勢とくは長根とる意
て同じ根おをくうう手と伸て毛と引張る尾と突刺さ
あやアがるのでめ一丈とく桶でも孔のでも乳の付ね根を
とと既思るるおあこもやア不疾の上はど加勢とくは長根とる意
謀果かたる心底が知らねる空懸にの世せぬややねる
茶の七 丈りやや自己とめら膚するのそら根するめは根を
お池で候せる根おは返しするのい方寸の内ふまのど一丈とくね
亦お代末岐の子丈とまど一うう智者の智考とていられと素案

中へ事放しを運入とて是をせしむるもあやうく湯の中へあがりて
私う天宮うへ頭へあひせやうとてさへ死んぬる船子の身下
いっとうづつ服きて居やうとて船子を舟にうつりて死んぬる
あけぬるとの身より毒桶の紐をゆめやうあつたのすそをせしめ
わくことごとくやうとて船を清くせしめしむるもあやうく
おのの力を捨らまては船もあつたもあつたもあつたもあつたも
府のまじやまきの槽を育とのまじやまきのまじやまきのまじやまきの
小僧やうとてうへに仰ねぢやうにうへにうへにうへにうへに

く指さすはのちおきておる茶の香が障りのまじやまきのまじやまきの
まじやまきのまじやまきのまじやまきのまじやまきのまじやまきの
かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
心附くもめて居る隣のおまじやまきのまじやまきのまじやまきの
かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
余り同じく顛倒するまじやまきのまじやまきのまじやまきのまじやまきの
強茶の香が居れかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
く大僧と人を捨除實際除て同じのまじやまきのまじやまきのまじやまきの

松橋に世の春も移りゆくやと表より人々入て来る
下た都が天宮天宮せり下む村双方後ふとこの尻隙
茶の尾を「月々夫が世に舞うるも心おは食可も膳房
茶の尾を「自にも夫後毎の尾を「果ぶらり梅お音
深んこびり月祝まの地がう

蛇の尾よ腫あがたまね流しゆく

あーとの湯ぞ今の思しゆ

七偏人卷之中 後

妙竹七偏人
林話

東都 梅亭金鷲編次

再説春次都が家る能樂之の茶め者下右都虚居
松の二人がは活きるとて出仕が嵐の吹し後のどろ寂寥と
まるとわう裏口の戸を瓦落裡と門不鳥た屋を
中す只今にお密さるが世為人は信はと云々実如ん廣
蓋の酒の青も春次都の首を傾げに子後ぞう一鼓馳う

花ハのうちサ老刺を振ふるをてて飛ぶる「彼奴等に
あてのチト氣張をちんちやア代の船合が出来とトコ見え
る「やアとと存との人言笑つれで懐の船合がよヲんやると
成と奴等の口が重下あごつて来て彼つやややとやのや
とこまてつらの船でもせんと彦太の隅へ進むつて並ぶの
「こまてつらの船でもせんと彦太の隅へ進むつて並ぶの
蓋ととり「白魚に生海苔貝のちりらに蒲「ニツ葉ふも世
代孫の船合めく「トク代孫の船合を「ツラのせてるを「揚の

中へ揚を突ここ「ツマ多熱うら「コサ何様「このごそりん
けめくろ入もどつこむやのがまめろ「左振りのけきど判
身お京も青濁をうりちやア淋しく「橋の先を焼着でか
不つろふも「流まつりりのご「こまてつらあか成程時辰七も孫の
取のりのごぬとあひ並ねるととて潮やこつふ巻るごらう「見え
のまつりもあひ入はなでこつけをまて「ののごけあつて味傍
汁とほけるの「コヤ大平をととのの「コサあつておのの屋南
人のあひまも「断円のかかり合ごらうそらうのけ方入て並

茶めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶
めどとの入は見や茶めも何返辞とある人のごとく云れん茶

のつてまゝの宜ぢやア後入うた根サノイ茶めも前の天鼓は
う前揚の格上のちやア何根ごマイ志のつて人おあとちやア
瓶も化さまとつてあう香陳の中で咽喉のかのりのふま根か
りのが何おるるのごと云まて二人の顔見合せまとくさい小声お
るりア彼方で自己連のとを化されんちやアわんと云や
がるみ程瓶とのふりの早く人の氣とるりのご何おりも
茶と雲の湯と雲の下飲とるおとんると碎碑の瓶ごらう
つた根サ着後引の瓶ごらうま合とあるとご一袖の梅葉

今度ものまのいふとていふやうに「何れんく」を頼む甘
口みるちやア押付ぬ「凶まる」が下まうこのう「頼み」
とて悪いさう番敷でのぶまとのみ沢おゆのうびサ「番強と
任持ゆ」ことと何ゆの葛西街屋の杭不遠へ相合せ
「左様」半田の福為の眷属も知れぬ人「何れん
めと懐入」のざらう「オサ高生」にも番番のがまとのいふ人
あても履きさうつけね人と名のざらうサト二人の少く不味
ふりの竊と評美と七房西へ下た糸と虚松が志す

あつめりあり「オサ茶め」のまごはつて本ねう「帰つて」受
取の強さちやアわんまに捕付まのト顔の処へ手とまき
腕のまの似とていふをまじつと怖り「十二」まが付こと「何う
美面目」にあらう「様」せ「ウム山やサ美」いご「まご」て今
湯の中へト是より彼喧嘩の次身をまじりく驚「ト」の
伏せ相手があがる捕らふとのみ西と逃去て来ぬあごの
と性まをばく春の糸がふととていふを拍たな箱うそまを
よめと相手が追うけ来るうとあつて見つうらわん相不履

おと懐へ入る番陳へ逃さるやうつこのご「おねサ大方向標町の
辨大お出交下このごらう「アレ矢張抗どトあつて居やアアア
「台抗おやアお入のうまてつんと狸う程の仕業ざらう「泥
らぶアのよう馬々「茶め存の世良め人雪陳へ捕獲
いざと云々「庶ッ放と亦出さうトのり者ざらう「遠へ
ねん庶け田庶ッ頼が庶ん目「う庶田庶お長の庶ん結
ち知どりて居るのうドレ「一寸庶鼻ん舞小性「果アト
雪陳の取人性「イ茶め存軍和勝が調さう「殊と出させ

此せまの取番共のどく續筋つて居る「劍戟とあすれん
ゆつて「自由ざらうト「吾まのさへ「身を懸て引張が
よりまらう「推へて居る故「コヤ何處も「振ふるを「て居る
の「珠門を固さね「ト「の「振へ「此処と出らさる「の
然し「おあ達の「朋友「甲斐の「お入「を「振ふるを「云々「自己と
おびん「中「相方「方「後「さうと云々「の「て「左「振の「の「わ入「「を「振
る「家切「を「さう「の「う「和「勝「が「調「さう「田「珠「を「あ「らう「の「の「ご「へ
美「正「に「調「の「せ「て「果「さう「「鬼「の「角「の「太「子「の「木「戸「を「は「ぬ「け「し「て

まきこころ世処をさますとこの出来ねトのいのでいへらむうに
おびやアグのこま板出さく、出アア何防までも運入て
居さろート云はるト亦出城を仕さるるやのヨト云るが
雪隠の戸をぬく顔を出し「おはア」おは御座をアおねん
ごんおあ、骨をわせやアグのて「自己ア運せえん来るごらうト
あつてまふおのちちがさ彼板安くと、おうとこの白さりの
云るが、度安の方へ僅んとする板「お」を洗のねへのう「ま
ごらて只捕獲とさるうごりのと「捕獲とさるて採ねやイ

茶
「チヨウやうまうい百成程おごぞト不生、女生は身を洗ひ此方
へ来たが「アアさうく城さう出さけこ「まつとやア宜が茶めら
かめへの引柄例ーと男のけ処の長屋の家をさるごことヨ下
たると二人で籠とさつて、城へ入る茶とけきとどかあお公云
て居ちやア能ねん喜ばさん不連て、けく黄てあやまらて来
るせへ「ア三史ちやアあの源を清さんの屋をさるごらう「九
振サその源を清さんとのあのサカーのるで毎度さんご上達の
けきとどのウ「まおやアるん不彼人が、おが宜とつてお捨ちやア

なれへそく世処不任んで居る程の事一割由子の宜事
示不仕へ者るうう歩行る者へ一何指してとんごつまうね
るをいふこのご一何友と一まごとのつく城の城垣へ踏んて
第一和義の破きと日おやア帷幕のうもろく伏勢が起つこ
り城の外の落穴が多うりあてこるせ阿修羅軍へ
子奮志んの符とる悪鬼羅刹へ三面六臂の鬼神をよま
小樹とる一敵の大勢味方の一人あむあひ二公とのご
のヲ防禦の伎術があるやアねえやアねえやアねえやアねえや
あひま

あんでる破はふ及んでる誘いの腰に用ゑの山八烟
草の煙のよとあげらるる正史と相違ふ味方の負勢を負
あての標とみて肩ふるがけを負の淋方火の車の
あまりのあまらるる獅子の魂と猪首ふさむに困せ
丸と号ける難波代の大刀と構へ傷金の利益するの
将小判の云延三年竹の証矢と世程のよく負彼一
備前院文の加平み人張の法弓と歟の皮の籠括三
小振り家のあひの標太麻毛へおんらるるあひのそりうと

うちり うちり 八百人の負年とあ後左右に引きさ七
偏人等二編引つた賣出と書する大旗と書す
棹の船尾ふ翩翩とひるぐ一葉門の知る路次の細
道後連する溝板と勇まふいさんで端東に大舟の
つ棹子先もささ落の煙際までひくと推考さ
却合ふかるる調子側ふありする年玉の万葉府
とひろの火火神のちと教さるるおろし表が尻落
禮の友「サア」お着のお客さるるがあのであるす「お着

のお客さるる「誰ぞ」一花分改助のちさ「左根う
そんなう一たん驚ううんきんえん云々運入口の
障子の蔭ふかくさくおるるといふくむ風呂の巾着
茶を右小引とて進「家玉の源を清け表とさや
里かり下吉布が扇をひらて教さるる意をさすは講
終かす「もうさるるといふ大の講終は白多葉門由
まくよりあり「ヤあ免るさの障子とあけの敷とて
て喜次布とてめとめ「飛分改助といふひの外茶め

又と使て深き清の昔もひつアまぜりその故胞さの
為ぬの私か次信七君のおるの夫表へ約とけ居立
あふり子「是の茶めをぐるんが平氣せゆおりのり
経心あつとらう」何うせんぞ檀の浦であぬの毒ま
てし度のみす「そ且の宜ぶお備候がまじらうて居と
は根子ぬ私もおぼ中さうと心つて上つこのごうサア
あ備ひるくおをるあすりて中せ入アカタイ上備候と候
あさるのいねぶが今くお松といひせえやせんア茶め

夜とおおさんのお宅へ倍礼おつはん出候とぞん下んま
とすはて居候とさう「さると茶めをかおあさんのお家
へ来つて候思へてさうね入目ぬの大變ごすす下此
下を帝か「お松と嘘とりの八百中のおやまう院文
と表御指の物嵐おひるかへ一會員の歎候のおる家
のあのお腹大とらびまふ賣ての月己か中へつて倍
礼のやうら「さめて居候とさうては居候ます」
ていお備候とさうて侍人おまのうらうらふは居候と

何程の又理屋を編むるものか 町内うちのことあるに及ませ
あぐろ私をほどとてよませうと 十二廿考君へ倍札に
つきて集らうとのので 四彦のますへ 五つお長屋のり
いんざり 支 ざらけ せん 十二廿 長
ゆい 今月のおあさんやせく 四若房子をん 十二廿 長
や 庭うちのこぞの 四彦のますん 生刻湯の時でお早
さんお矢札とて 今亦人遠でおあさんと 支
うと男で 四彦のますうと 支 人物を倍札へ 十二廿 成社
イヤ 支 別後 様様 ありあがるの 四彦 ちうぞい

何程の又理屋を編むるものか 町内うちのことあるに及ませ
あぐろ私をほどとてよませうと 十二廿考君へ倍札に
つきて集らうとのので 四彦のますへ 五つお長屋のり
いんざり 支 ざらけ せん 十二廿 長
ゆい 今月のおあさんやせく 四若房子をん 十二廿 長
や 庭うちのこぞの 四彦のますん 生刻湯の時でお早
さんお矢札とて 今亦人遠でおあさんと 支
うと男で 四彦のますうと 支 人物を倍札へ 十二廿 成社
イヤ 支 別後 様様 ありあがるの 四彦 ちうぞい

志んおやアがるう人のぐびと調てとやアがるのつそのおお
よま様のお湯妙喰見んげさう中の汁がさるおさ
とお経とあげては神志やアお今へ左根サこのつア上ん
仕は神さうが官まやお入ト入人の亡者さうのびるおさ
まて唐蓋と持いんとさるそのおさう春の方めん大庄上
以上酒のおりイリ ドウー オヒウ。テウロウー テウロウー
とさるがう敷助が所さふのき并指行の突袖
志んあう威張るのく運入さるは所裏はよりも障子
おさる

以上酒のおりのイリドウー オヒウ。テウロウー テウロウー
とさるがう敷助が所さふのき并指行の突袖
志んあう威張るのく運入さるは所裏はよりも障子
おさる

ふおき賣とくひのそらう山萬がのかりまきう飛八とれお
改物との被等のけしぬきれを中にかつてんぞ
るりてぬねとおきるるナ「方箱とてまかようまき
はるるイヤ十三喜次希どの先刻も花や中付山海
の孫味を先上へ並るるまづ室てあつては産らう
まき「おちお由先刻希うとてとて是るる四人の先と申
かまづく喰ひしめ入おさうりの跡し並ははるる花お
は産らうまき「正美う「しひね入せく志ののるるまきア
ごせ飛八

がくこトまふかまき喜次希か下とて人警らうる述のと
サく「定地まき「執念のからく「廣蓋を山とて
り「マ下おあご「運へナ引ハイ里の馬ア申御ナ
お引えつてやうらやごつとてまのぞく「マイそ運傾
てのつと「籠まき「溜の冷さう大沖へ掛るるまき
是より七人お圓飛跌不どお喰不どお改女飛八か
持まき「二橋のしそまき「持さるるまき「板のるの隅お
らうげ廣蓋の上お入おさうり空然らう「脱お先

刻^まの丸^{らん}軍^{ぐん}ふ^まふ^らう^らと^らの^ら水^{みづ}と^と大^{だい}君^{きみ}ふ^ふさ^さえ^えり^り酒^{さけ}
戦^{いくさ}多^{おほ}く^くを^をく^く終^はつ^つの^のご^ごが^が初^はり^りを^をえ^えて^て由^{よし}を^を終^はつ^つり^りち^ちや^や
ね^ねの^のご^ごと^とま^まが^が持^も出^でま^ま積^つり^りの^の君^{きみ}を^をい^いて^てま^まの^の
と^と戸^と初^はの中^{なか}より^{より}二^に種^{しゆ}二^に種^{しゆ}の^のり^りの^のと^とま^ま知^ちり^り是^{こゝろ}の^の及^{及び}
の^の尾^{おし}の^の端^はと^と垂^たふ^ふさ^さり^りる^る者^{もの}の^の後^{あと}金^{かね}酒^{さけ}宴^{えん}ま^ます^すく^く
盃^{さかずき}み^みて^てら^らの^のも^もつ^つべ^べた^たと^とも^もん^んを^をえ^えぎ^ぎり^りけ^けり^り一^{いち}時^{とき}も^も後^{あと}
月^{つき}の^の初^は卯^うと^との^のみ^みの^のご^ごら^ら連^{れん}中^{ちゆう}一^{いち}月^{げつ}で^で押^{おし}出^でし^しち^ちや^や
どう^{どう}ぞ^ぞら^らう^う一^{いち}室^{むろ}を^をえ^えり^りよう^{よう}を^をえ^えり^りが^が一^{いち}亦^{また}持^も人^{ひと}と^とも^も不^ふ快^{かい}

ら^らと^とア^アの^のこ^この^のつ^つラ^らツ^つ自^{みづか}己^{みづか}と^との^のみ^み好^{この}男^{おとこ}み^みが^が佳^よう^うと^とな^な
根^ねの^のつ^つね^ね入^い可^かイ^い亦^{また}凸^{とつ}凹^{おぼ}ど^ども^もが^がい^いと^と合^あの^のつ^つ一^{いち}隣^{りん}う^う押^{おし}
う^う船^{ふね}で^で佳^よう^うう^う一^{いち}隣^{りん}も^もせ^せよ^よ船^{ふね}も^もあ^あは^は七^{しち}偏^{へん}人^{にん}と^とも^もい^いふ^ふ
ご^ごの^のみ^みが^が只^{ただ}佳^よと^との^の法^{はふ}の^のみ^みめ^め入^いる^るの^の只^{ただ}佳^よめ^めの^の人^{ひと}も^も何^{なに}
後^{あと}で^でも^も酒^{さけ}と^とま^まる^るが^が宜^{よろ}し^し可^かイ^い新^{あらた}ら^らね^ね兵^{へい}の^の佳^よも^もあ^ある^るの^の
の^の何^{なに}う^う趣^{おもむ}向^むと^とま^まア^ア成^なめ^め下^{した}の^のみ^みも^もど^どラ^ラ一^{いち}隣^{りん}を^をめ^めり^りが^が及^{及び}皆^{みな}
華^{はな}英^{えい}不^ふや^やと^とま^まの^の趣^{おもむ}を^を去^さと^とあ^あつ^つま^まる^るの^のサ^サ一^{いち}丈^{ぢやう}の^のサ^サを^を例^{れい}の^の人^{ひと}
ま^まる^るも^もど^どラ^ラ左^{ひだり}根^ねで^でま^まく^く何^{なに}う^うサ^サ面^{めん}白^{はく}趣^{おもむ}向^むが^がラ^ラツ^ツト^トも^もい^いひ^ひじ^じと^とア^ア

